

## 十九世紀の広東語(2) “個”

竹越美奈子

十九世紀広東語は、国際貿易都市香港の発展とそれに伴う大幅な人口流入により、わずか百年あまりの間に劇的な変化を遂げ、現在の広東語の形成に大きく影響した。またこの時代には外国人（宣教師、貿易商人、外交官など）の広東語学習のニーズに応じて多くの教科書や辞典、文法書などが編纂された。十九世紀粵語の研究は、このように豊富な資料が利用できるという魅力もあり、いわゆる「早期粵語研究」として音韻・語彙語法の両面から最近二十年あまり、盛んに研究されてきた。早期粵語の語彙語法を中心に、これまでの国内外の研究成果を項目別に紹介する。

### “個”：量詞から指示代詞へ\*

\*現代広東語では“個”（[ko33]陰去）は量詞、“個”（[ko35]陰上）は遠称の指示詞

—

十九世紀初めの資料では“個”は量詞と指示詞の二つの統語的機能を持ち、発音は[ko]、声調は陰去で表されていた。その後“個個”（指示詞+量詞）という組み合わせ（=以下、甲類）における指示詞のみが陰上で読まれるようになり、徐々に他の場合（=以下、乙類）の指示詞も陰上で読まれるようになって、最終的に二十世紀中葉に指示詞は陰上、量詞は陰去という役割分担が成立して今日の姿になった。この変化は以下の4つの段階を経た。

#### 1.1. 第一段階 陰去

表1 指示詞 ko の声調

<sup>i)</sup>この3書は声調の記載がない資料。

	甲類			乙類		
	陰上	陰去	N.D.	陰上	陰去	N.D.
Morrison1828 <sup>i)</sup>			17			54
Bridgman1839		7			82	
Bridgman1841		7			84	
Williams1842		7	1		23	10
Devan1847 <sup>i)</sup>			9			15
Bonney1854 <sup>i)</sup>			21			128
Williams1856		2			34	
Devan1858		8			29	

この時期は、指示詞 ko の声調はすべて陰去である。（これは指示詞 ko の来源が量詞であることを物語る）しかし、すでに陰上への変化のきざしが見える。Williams(1856:167)の ko33ko33(that one)の項に以下のような注釈がある。1) ko33ko33: that one.(often pronounced ko35ko33, to distinguish it from ko33ko33 every)

すなわち、甲類はすでに上昇調<sup>1</sup>で読まれており、それは“個個”（量詞＋量詞、すべてのという意味）と区別するためであった。しかし、これはあくまでもこの組み合わせにおける変化であり、指示詞 ko の本来の声調は陰去だと認識されていたこともうかがわれる。

## 1.2. 第二段階：甲類は陰上、乙類は陰去

表 2 指示詞 ko の声調

	甲類			乙類		
	陰上	陰去	N.D.	陰上	陰去	N.D.
Chalmers1859	1				6	
Lobscheid1864	6				36	

この二書の記載は明瞭で、甲類はすべて陰上、乙類はすべて陰去になっている。甲類が陰上になるには“個個”（量詞＋量詞、「すべての」）と区別するためというりっぱな理由があり、そのために比較的短期間に変化が完成したのだろう。

## 1.3. 第三段階：甲類は陰上、乙類は陰上と陰去が混在

表 3 指示詞 ko の声調

	甲類			乙類		
	陰上	陰去	N.D.	陰上	陰去	其他,N.D.
Castaneda1869	1	2			2	
Dennys1874 <sup>i)</sup>	1		159	1	1	397
Eitel 1877	1 <sup>ii)</sup>			2 <sup>ii)</sup>	28	
Chalmers1878	2			4	5	
Ball 1888	13			27	49	
Fulton 1888	2			9	54	1
S & Lee1888					9	
Kerr1889	10	2		2	57	2
Chalmers1891	2			4	5	
Hess1891	14	8		6	100	15

<sup>1</sup> 粵語には意味の変化を伴う変音という現象がある。小文は、上昇変音と陰上の調値を同じと考える。

Ball1894	4			4	134	4
Ball1902	14			10	196	2
Ball1904	17			11	201	2
Wisner1906	5		8		1	279
Ball1907	13			25	51	
Chalmers1907	6			4	23	
Ball1908	7			12	64	
Aubazac1909	1	5			60	
Eitel1910	9			21	30	
Aubazac1912	2			2	193	
Ball1912	17			12	200	2
Jones1912	11 <sup>iii)</sup>			24 <sup>iii)</sup>	5 <sup>iv)</sup>	
Cowles1915	8			23	64	
Cowles1916	3			36	43	
Cowles1918	1			23	42	1

i) 声調の記載は初出時のみ。 ii) 陰去で読まれることもありという注釈つき。  
iii) 音符による表記。 iv) 記号による表記。

甲類はだいたい陰上になっている。これに対して乙類は陰上、陰去ともに見られ、一致しない。興味深いのは Jones(1912) の記述である。この書は音符による表記と声調記号による表記の両方を採用しているが、乙類の場合、音符による表記ではすべて陰上になっているが、記号による表記は陰去である。つまり、実際にはすでに陰上で読まれていたが、人々はあくまでも陰去と認識していたのである。なお、この時期には指示詞に新しい漢字が出現する。

表 4 指示詞 ko の漢字表記

	甲類			乙類		
	咽	個	その他	咽	個	その他
Castaneda1869		2	1		2	
Dennys1874 <sup>i)</sup>	145		15	255	123	21
Eitel 1877		1			17	13
Chalmers1878		2			9	
Ball 1888	13			21	55	
Fulton 1888	2			10	54	
S & Lee1888						9
Kerr1889		12			61	
Chalmers1891		2			9	
Hess1891	4	17	1		106	15

Ball1894	3	1			142	
Ball1902	14			11	197	
Ball1904	17			12	202	
Wisner1906	8	5		34	246	
Ball1907	13			17	59	
Chalmers1907	2	4			22	5
Ball1908	7			13	63	
Aubazac1909		5	1		31	49
Eitel1910		9			42	9
Aubazac1912		2			159	36
Ball1912	17			13	201	
Jones1912	11			25	4	
Cowles1915	8			18	69	
Cowles1916	3			45	34	
Cowles1918	1			45	19	1

発音が異なる語を同じ漢字で表記するのは気持ちが悪いものである。“咽”は Dennys(1974)で初登場し、以来甲類を中心にどんどん普及していった。

#### 1.4. 第四段階：甲類、乙類ともに陰上に

表 5 指示詞 ko の声調表記

	甲類			乙類		
	陰上	陰去	その他	陰上	陰去	その他
Chao1947a	13			79		

表 6 指示詞 ko の漢字表記

	甲類			乙類		
	咽	個	その他	咽	個	その他
Chao1947b	13			79		

Chao(1947)の時代には変化はほぼ完了し、指示詞の声調は陰上、漢字は“咽”と、現在と同じになった。

## 二

以上をまとめると、現代広東語の指示代詞“咽”(ko,陰上)の来源は量詞“個”(ko,陰去)であり、それは一度に変化したのではなく、まず意味弁別上の必要から一部の組み合わせにおける指示代詞が陰上にかわって、その後一語二音という不安定な状況を嫌って徐々に他の場合の指示代詞にも変化が及び、ついには専用の漢字まで獲得して、最終的に「指示代詞は“咽”(ko,

陰上)、量詞は“個”(ko,陰去)」という現代の形に落ち着いたのである。

“個”の変遷

			19c 初頭	19c 中葉	19c 末	20c 初頭	20c 中葉
指示代詞	甲類	声調	陰去	陰上			
		漢字	“個”		“個”		
	乙類	声調	陰去	陰去／陰上		陰上	
		漢字	“個”	“個”／“個”		“個”	
量詞		声調	陰去				
		漢字	“個”				

(この回つづく)

早期粵語資料(arranged chronologically)

省略。(前回を参照)

参考文献

竹越美奈子 2005 廣州話遠指詞“個”的歷史演變 □□ 中國語文研究 □2005(2), pp. 19-24.